

自由における友説

ショーリング『自由論』を読むために

平 崑 里 弘

前 書 も

本稿は、一八〇九年に公刊されたショーリングの『人間的自由の本質及びそれに関する諸対象の哲学的探求』（以下『自由論』と略記）をじつ読むかといへ、極めて基本的な問題について考へよいのかのどある。そのためには『自由論』の内実についての解釈は行わない。ただ、本稿のような解釈以前の考察は、少なくとも一つの試論として、必要なものではないかと考える。

1 ショーリング哲学における『自由論』

『自由論』をショーリングの著作中で最も優れたものとする論者は多い。

西谷は『自由論』の訳者緒言で、「ショーリングは幾多の輝かしい思想の峯を越えて、IJの書に至つて最も高い頂きに達した」と評し、同時に、『自由論』は「哲学的文献全体のうち最も深く考えられたもの一つ」だとするフィッシュヤーの評言をも引いている。ハイデガーも「IJの論文はショーリングの最も偉大な業績であり、同時に、ドイツ哲学の、したがつて西洋哲学の、最も深遠な著作の一つである」とまで評価している。

おそらく幾らでも掲げられるだらうとした評価の突端に位置すると聞えるのは、遙れば、この著作を「深い、思弁的なもの」とするベーゲ

ルの『哲学史講義』における評價である。しかし、ベーゲルは同時に、IJの著作は「ただで済む」（einzeln für sich）あり、哲学において個々のものを何の展開するかは「決してない」（決して）と評す。哲学の歴史全体における自由の位置について、直観的であつたベーゲルが、同じく直観的なショーリングに向かつて述べた言葉は、当時の思想状況の一端を示してゐる点で興味深いとともに、一面の真実を突いてゐる。実際、『自由論』はショーリング自身の編集による著作集の第一巻における書き下ろしとして刊行されたものの、著作集の計画はIJの一巻で途絶し、以降ショーリングは長い沈黙に入る。しかし、IJは『自由論』の孤立は、上に掲げた賛辞とも矛盾することなく両立し得る。それはショーリング自身の哲学の歩みにおいて、哲学史の流れにおいて、高ければ高いだけ、余計に孤峯なのであると。

しかしながら、研究の進展に従つて、IJの見方は修正されるを得なくなってきた。後期哲学の重要性が認められることによりてショーリング哲学についての見方は劇的に変化し、特に『自由論』との関わりで言えば、直接後続する時期に執筆された膨大な「ヴォルタルター」草稿の掘り起こしの結果、『自由論』が、少なくともショーリング自身の歩みの中では決して孤立した著作ではなく、むしろ、氷山の一角とも言ひ得るものであると考へられるようになった。IJの端でとつわけ功績あつたファマンスは、『自由論』期を含め、一八〇六年から一八一一年まで

を「ヴォルトアルターの哲学」として総括し、『自由論』と『自由論』以降とを結び付けることに努力を傾注している。^⑦『自由論』は終わりではなく、「将来の後期哲学を模索するその開始を示すものなのだ」とテイリエットも言う。^⑧ハイデガーは彼の明白な独創性にもかかわらず、三〇年前になお支配していたのと同じ立場に依存している。

こうした研究の趨勢は現在も進行中である。刊行中のショーリング全集批判版や、新たな資料の発見もそれを加速するだろ^うう。しかし、こうには疑問も生じて来る。単純化して言えば、こうした研究の流れは、『自論』の意義を見失わせる危険に繋がるのではないか、とこうしたことであ

と手厳しい批判している。¹⁴⁾『自由論』は疑いもなく高峯であり、孤立していないとしても自立したテキストである。古代・中世ならざ知らず、近代において、書かれたものが公刊されるか否かは決定的な意味を持つ。その意味では、例えば「ヴェルトアルター」という著作は存在しない。無論、それが未完かつ未刊でありながら重要なテキストであることに変わりはない。しかしだとしても、『自由論』をこの形で公刊することに踏み切ったのも、「ヴェルトアルター」を公刊しなかつたのもシェリング自身であって、その決断は重い。

る。『皿田繪』がシロコノケの他の「キヌアシ」の密接で複雑な関連の上に成立しこれらはせゆいかど、この点は勘定われぬぐれでせな。『皿田繪』の最終話で示唆われてこる後続の繪判とは、既に「ハコルト・アルター」を押おし擲げぬぐれでおののハ^レ、内容は闊つて單純」^レと見てや、「戦」のなごみ^レ、「出船せな」^レ（§. 37, VII, 400）にこゝ『皿田繪』の印象的なハコーブは、後の「ハコララト・アルター」草稿（VII, 219）にや響こ^レおり、前者におけ^レる「根拠と実存」や「無底」^レにこゝた基本概念に相応する表現も後者には

その『自由論』は「挫折」した試みではないか、したがつて、「ヴェルトアルター」によつて補われるべきであつたのではないか、と、こう反論は可能である¹⁵。しかし、著作において与えられてゐる解決を「成功」と見なすか「失敗」と見なすかは、「読む」との後でなされるべきであつて、今の段階のわれわれのなすべきことではない。まして、『自由論』に「挫折」や「不十分さ」を見るとしても、外部からそのための判断基準を たとえそれがシェリング自身のものであつたとしても持ち込むのだとすれば、本末転倒以外の何ものでもないであろう。

見出せる。しかし、それにおいて、シェリング自身の手で刊行された二
個の著作の独立性を奪つてしまふ必要まではない。例えば、「無底」の
概念に相当する表現を「私講義」や「ヴェルトアルター」から抽出した
概念に相当する表現を「私講義」や「ヴェルトアルター」から抽出した
アマンス⑯に対して、辻村は「それらの中には確かに該当すると思われ
る表現と明白に誤りと思われる表現とが雑然と列挙されてい」ることを
指摘し、「フールマンスの前掲書は……精神史的に考察したものとして
は、甚だ教えるところの多い優れた労作であると思われるが、シェリン
グの思想の中核、就中『自由論』における「無底」に関する彼の見解の
如きは、内容的には極めて貧困であり、哲學的に何の開示をも『えなし』

と手厳しい批判している。¹⁴⁾『自由論』は疑いもなく高峯であり、孤立していないとしても自立したもののが公刊されるか否かは決定的な意味を持つ。その意味では、例えは「ヴェルトアルター」という著作は存在しない。無論、それが未完かつ未刊でありながら重要なテキストであることに変わりはない。しかし、たとしても、『自由論』をこの形で公刊することに踏み切ったのも、「ヴェルトアルター」を公刊しなかつたのもショーリング自身であつて、その決断は重い。

その『自由論』は「挫折」した試みではないか、したがつて、「ヴェルトアルター」によつて補われるべきであったのではないか、という反誦は可能であつた。¹⁵⁾しかし、著作において『えらべられて』いる解決を「成功」と見なすか「失敗」と見なすかは、「読む」との後でなされるべきであつて、今の段階のわれわれのなすべきことではない。まして、『自由論』に「挫折」や「不十分さ」を見るとしても、外部からそのための判断基準をたとえそれがシェーリング自身のものであつたとしても持ち込むのだとすれば、本末転倒以外の何ものでもないであろう。

われわれはそれが公刊され、かつ優れた著作であつたが故に、公刊さざれなかつた草稿にも興味を持つのであつて、逆ではない。それは高い峯であるが故に広い裾野を持つのである。埋もれがちであつた草稿の資料価値にのみ興味を集中することは、それ自体歴史家としての仕事には相成しても、哲学からは遠い。ただ念のために言えば、われわれは、『自由論』を読むために他の資料を用いる」と血体に否定的であるのではなじい。裾野だけに留まることによつて、あるいは他の峯らしきものを見ることが、『自由論』の高さを誤認することに危惧を抱くだけである。

更に言えば、その裾野は、時期的にそれ以降の思索に及ぶばかりでは

なく、以前の歩みにも拡がつてゐるばかりである。『自由論』初出の際の著作集には、『哲学の原理としての自我について』(以下『自我論』)を始めとする初期論文が同時収録されている以上、『自由論』とそれらの論文にシェリング自身が連續性を認めていたことは明らかである。また例えば、『自由論』における「根拠と実存」の区別は、シェリング自身が主張するより(§. 12, VII, 357)、一八〇一年の『私の哲学体系の叙述』(以下『叙述』)や、あることは「重力と光」といつ形でなら自然哲学期から既に見られるものである。¹⁷ 時期的に直近の著作『哲学と宗教』との関係も、当然考察されねばならない。

われわれの基本的な視点は、『自由論』を独立した著作として見なすことにある。だが、繰り返すなら、それは『自由論』以外のシェリングの著作、草稿を無視すべきだと主張することは繋がらない。むしろ、他のテキストとの対比は、『自由論』の特徴を浮き彫りにすることに寄与するだろう。しかし、『自由論』とこれ以前の思索との関係についての研究は、両者間の非連續を指摘すること多いため、『自由論』の独立性を損なうことは少ない。それに対して、『自由論』とそれ以降の思索との関係の研究は、『自由論』ことつて慎重に考えられなければならぬことは指摘しておかなければならぬ¹⁸。

2 同時代思想における『自由論』

ブッフハイムは『自由論』の最新刊本への序文において、「根拠と実存」に集約される神の内的な二元性の起源を丁寧に跡付けている。それは初期の思索との関係から『自由論』を特徴付けるものであると同時に、更にまた考へるべきコンテキストを提供するものもある。なぜなら、ブッフハイムはこの概念の定式化の過程において、ベーメやエッティン

ガーの影響とともに、とりわけヤコービとの関係が重要である」とを強調しているからである。

歴史的な経過を見ても、ヤコービによつて引き起こされた汎神論論争がドイツ思想史にとって大きな意味を持つたことは否定し難いし、この間にヤコービのいわゆる『スピノザ書簡』が果たした役割は大きい。シェリングを含め、これを通してスピノザ哲学に対する興味をかき立てられた者は多い。だが、従来この点が指摘されることはあっても、ヤコービの存在自体はそれほど重視されなかつた。彼の意図はスピノザ批判であり、それがスピノザ復権に手を貸したことは、いわば皮肉な結果であつたからである。ヤコービは媒介としての役割を指摘されても、思想史の周辺に留められてきた。¹⁹

しかし、シェリングに視点を戻せば、ヤコービはシェリングとスピノザを結びつけたばかりではなく、スピノザ批判の延長上で、スピノザ主義を受容したシェリングに対しても批判を行い、その影は『自由論』のいわゆる序論部分に明らかである。ヤコービは更なるシェリング批判を展開し(『神的な事物について』一八一年)、シェリングの反批判を呼び起こす(『神的な事物に関するヤコービ氏の著作に関するシェリングの記念』一八二一年)と、この一連の経過はヤコービ シェリング論争の様相を呈している。『自由論』で最も異様に見える点の一つは、若き日に全く拒絶されていた神の人格性が、この時期に唐突とも言えるような仕方で導入され、しかも中心的な役割を与えられるようになつたことであろうが、その導入の契機がヤコービの批判(への反動)にあつたとすれば、話は明解になる。

こうしたヤコービの役割は従来から注目されてはきたが、その意味を重く見るのは現在の研究の一つの動向である²⁰。例えばブリュッゲンや久保²¹は、ヤコービとの関係がシェリングの思想の変化に深い影響を与えた

ていると見てている。またペーツも、ヤコービとの関係は部分的なものではなく、かつ、時期的に見ても一八一一年に終わるものではないと主張する。それどころか、「シェリングによる、一八一七／一八年の形式における消極哲学と積極哲学との区別を、一八一／一九年のヤコービによる自然主義批判への解答として解明する」という極めて射程の広く、魅力的な議論を提出するのである。²⁷

だが、研究のための新しい視点の提示は、常に相対的な布置を持つ。ヤコービの役割が強調されるのは、今までそうした視点があまりに欠けていたが故にではないか。シェリングにとって目の前に存在したのはヤコービばかりではない。『自由論』で直接言及されていいるフリードリヒ・シュレーゲルの存在もあれば、フィヒテ、当然のようにヘーゲルの存在もある。フィヒテについては直接の言及も多く、ヘーゲルについては言及はないものの、シェリングが意識しなかつたという方が考えにく²⁸い。つまり、広く考えれば、シェリングにとってのいわば「ヤコービ問題」とでも言えるものは、前節で取り上げたシェリングの思索の流れと『自由論』との関係の問題と並んで、シュレーゲルやヘーゲルといった同時代思潮と『自由論』との関わりの問題に包含し得るものである。

こうして考えてくるなら、『自由論』にとつてのヤコービの重要性は、シュレーゲルやヘーゲルの重要性に劣らないとしても、後者の重要性を消すものであるかどうかは、判断の難しいところである。その焦点をヤコービに置くか、あるいはシュレーゲルに置くか、他の誰に視点を置くかは、研究上の観点によるということになるのであろうか。しかし、もしことにそうであれば、視点は研究者の数だけ成立することになつてしまふ。それこそ相対主義的な事態に陥つてしまふのではないか。無論そうではない。第一にそれぞれの観点は、それ自体で固有の意味を持ち、それぞれに明らかにするところが異なつてゐる。また、例えば当該の研

究者の視点が他の視点と矛盾する場合には、より説得的な観点が優位に立つのは当然である。だが、もし他の解釈と矛盾しないとしても、その視点がシェリング自身のテキストに矛盾しているのであれば、そもそも成立し得ないのも当然である。どの視点を探るにせよ、その正否を決定すべきなのはテキストであり、数々の歴史的な事実にテキストを埋もれさせるべきではない。

以上われわれは、『自由論』を他との関係において見る一つの視点を批判的に概観してきたが、次には、『自由論』というテキストそのものから考えてみなければならない。

3 「形式」の問題

だが、そのためにも、迂遠なようではあるが、叙述形式の問題を考察の出発点としてみよ。あまり注目されていないが、シェリングは実際に多様な叙述形式を探つてゐる。

ざつと見ても、論壇デジュー作である『自我論』（一七九五年）のような論文形式は勿論のこと、同年『独断論と批判主義に関する哲学的書簡』の書簡形式、『自然哲学の最初の体系草案』（一七九九年）などの講義用配布物、『超越論的觀念論の体系』のように体系的外觀を備えた大著もあり、『叙述』（一八〇一年）の幾何学的叙述形式、『ブルーノ』（一八〇一年）のような対話篇もあれば、翌年の『学問論』の講義形式、自然哲学に関する一つの箴言集（ともに一八〇六年）もある。『エッシェンマイヤー文書簡』（一八一三年）のような文字通りの書簡ですぐに公表されたもの、小説『クラーラ』（一八一〇年）のような試みもある。ただ、これ以降に残されたのはほとんどが著作の草稿か講義ノートである。

研究者にとってこれらがそれほど問題にならないのは、こうした叙述

の形式は、せにせに語り方の問題であつて、哲學的な思惟と直接関係を持たない、一義的なものと考へられ、またかくに一貫したものが見いだされるわけではなにからだね。

しかし、『叙述』に関する形式は大きな問題にならぬ。シーリングは若一頃、『自我論』序文 (I, 159) やクーゲル宛書簡 (一七九五年一月六日付) で既に「スピノザ風トナカ」に因敵するものを書くところの計画を口にしており、その長年の懸案がこよこよ実現されたのが『叙述』であると見なし得るからである。しかも、『叙述』序文によれば、内容的に最も近いスピノザの『ヒチカ』を模範としたのだといふ (IV, 113)。だが、形式は模倣できても内容を模倣するにとどまらない。また、実際に出来上がったものは、形式に関しては『ヒチカ』よりもむしろカホルフの量産した教科書に近いものである。ただし、その後に書かれた二つのアフォリズム論文は、実は、かなり緩い幾何学的形式、あるいは少なくとも演繹的な叙述方式を採つてゐるから、シーリングがかくの形式に未練を持つていたことは窺われる。

もう一つ注目に値するのは『ブレー』であらへ。哲ニ田たひアハトヒトニ親しきでいたシーリングが対話編を採用するにとせば当然である。しかしシーリングは、『哲學と宗教』序文 (VI, 13-15) に記のねむる所、対話篇を単なる形式以上のものとして高く評価してゐる。やれども、『ブレー』の続編もまた対話篇であるせうだつたが、外的事情での完成が許されなかつたところ。しかつて、文学的ないし美的な趣味の問題として、したがつて非哲學的なるのひとつて處理せねかもつねな。全体を見渡してみて極めていとむず、結果的にやつたりてしまつた形式である講義形式を除くと、シーリングが何いかの意図を持つて多くの叙述形式を試みたのは、回一哲學の時期を頂点とする前の前後であるといふであらへ。『血田論』にはやはや立つた形式はなく、やれどいのか、

これが実質的にシーリング最後の公平著作となつてゐる。

しかし、初期の著作や論文、中でも『血田論』や『哲學的書簡』は一種のアジトーショットとして読むことよりも出来よい、実際、文中には命令法や呼び掛けが多用されてゐる。それは形式とは言えないまでも、シーリングの固有の文体や書き振りがある。その意味では、例えば「ガーネトアルター」の文体に叙事詩・神話の趣を出すことでもある。では、『血田論』そのものにはスタイルを持つと血田論であるのか。その文体は幾分速く、熱くがあり、かつ、「かなり憲の感じ」、いみ入った文体で書かれてゐる。無難、それ自体は特徴ではあつても根本性格とは言へないであらへ。だが、この、こわば一見些細な特徴しかし、われわれの見方によれば、IJの著作の根本的な特徴を示唆してゐるのである。

4 血田とねむる対話

以上のよひな形式、文体への決まりかねば、『血田論』における次の論難は、極めて興味深くものとなり得る。

「現在の著作[『血田論』]はもとより、たゞ対話としての外的形式はなことせぬ、つかつては対話のものと並立してゐるにあら（alles wie gesprächsweise entsteht）」（シーリングは、IJが採つた行き方を、将来的にやめた保持するだの）（§46, VII, 410, Fn. 2）

『哲學と宗教』序文では、「哲學とつては、そのところのやせなべ、それを血田の内に恒徳を極めてゐる」（VI, 13）とあくまで話恒徳してゐた「対話（論）」を、IJはシーリングは、「外的形狀」を置くべし。何がやつわせたのであるのか。

「外的形狀」はこのやのせぬつては、「外的内徳」などあつ得ない。著作として形狀と内容をわざが持つ意味は異なる。しかし、形狀が

「外的」であると語られるとするは、それは内容と無関係であるからであつた。だが、形式は一回成立すれば、内容と無関係であることは間違ひだ。内容そのものを規制するにはじめにならぬ。「神的」と呼べる著作があるとするれば、形式と内容は不可分の統一を持ち得るようだが、われわれにあつては「形式」はあたかも『自由論』における根底 (Grund) の如く独立して働き、著作の中心から逸れて著作にとつての悪、即ち破綻をもたらしかねない実在的な質料性を持つ。やつした破綻の一例が『叙述』である。しかし、『哲学と宗教』のシホコンハグヒとつて「対話」とは、「自立」にまで形成を遂げた哲学が独立で自由な精神において取り得る唯一の形式 (VI, 13) であったから、対話篇は、形式であるとは言へ、本来は自由を保証するものでなければならぬはずである。それが「外的」であるといふわれるのを、『自由論』においては、やはや形式としての対話ではなく、おれつて対話そのものが重要になつてゐるといつて他ならない。『全てが対話的に成立してゐる』といふ以上、その対話的有り様は『自由論』にとつて内的・本質的であり、著作の「成り立ち」そのものであり、しかも、この著作の「全て」に関わるものである。更にシヨーリングはこの有り様に直覺的であるばかりではなく、それを将来に涉つて選び取る決意を示してゐる。だとすれば、この対話性において『自由論』を読むことじやん、シヨーリング自身が、やして『自由論』といふ著作そのものがわれわれに要求してゐる読み方であることにあつた。

シヨーリングのこの言葉に注目してゐるのはわれわれだけではない。

シフハイムは、『自由論』の方法上の特殊性を論じた部分でこの箇所を引き、「対話的な成立」の意味を、「一般に抱かれる問いを、自由でありながら、絶えず追跡すること」であり、しかもそこには「単線的で口セシトの嵌つた証明形式の代りに、種々の側面から常に新しく生じてゐる刺激の組み込み」が行われてゐるといふ理解をしている。この着目は正當

である。『自由論』の文体が「かなり息の長い、じみ入つた」ものであるのは、いわした対話性が文体にまだ反映したかじりたのである。『自由論』においては、ただ一つの文の中に、幾つの反論とそれへの答へがつてゐる。そのために情け余りて言葉足らずの感はあるものの、したがつてしづかば「飛躍」を指摘されるやのを認められてゐるといふ。『自由論』の文体は、開かれるべき「対話」の無数の襞を織り込んだものなのである。

しかし、問題はその刺激、反論がじみから来るものであるのか、つまづ、「対話」が何との、なじし誰との対話なのか、どこへいとである。すぐさま思ひ起つたのは、ヤーノルトやシヨーレーゲル、あるこせくーゲルの如きである。なむせび、上掲引用を含む注で取り上げられてゐるのがシヨーレーゲルの書評文である以上、少なくともシヨーレーゲルを念頭に置いたものと考へるのが妥当であるように見える。あることは、ブッフハイムが特に注意深く明らかにしてゐるよつて、エトキンガー、バーダーやシヨーベルトとつた神秘主義に属する人々の刺激も挙げられよう。しかし、ことはそれほど単純ではない。

まず、上掲引用を含む、長い脚注の全体に注目しよう。ヤーノルトは、シヨーレーゲルの書評文を枕に、ドイツ思想界に「ペトロ (Schwindel)」が蔓延してゐるといふ嘆きが語られ、慰めになるのは精々、それに自分が関わつておらず、ヒュスマスの言葉「私は常に独立であつたかつたし、盟約者や徒党を組む者達以上に私の憎むものはなし」と語り得るといつて自覚があることだ、と言われた後、更に次のように続く。

「著者は一派の設立によつて他人から、とりわけても自分自身から探究の自由を取り上げようとしたことはない。著者は、自身が常にその自由のなかにあるものと明言つたし、また、おそらくはこつまでもそこにあることを明言するだらう。」

この直後に、上掲引用が続くのである。IJの異様さは何であらう。あ

らゆる党派性への拒絶[◎]と、対話の宣言。IJの「の」や「は」は果たして直接に結び付くのであらうか。両者を結び付けてくるものがあるとすれば、それは唯一「自由」である。だが、その自由とは、同じ注の後半で述べられていることからすれば、驚くべき自由である。ショーリングは書く。IJの著作はより明確に、誤解を生まないよう手書き[◎]とでもできたが、それを敢えてしなかつた。これで誤解する者は去るがよ。」呼びもしない追随者達や反対者達は、『哲學と宗教』を黙殺したよ[◎]と、IJの著作『自由論』をも黙殺するがよ。

ここにあるのは、「対話」とこのよつせ、一切の拒絶であるかのよつに見入る。少なくとも、ショーリングが「IJの書の「対話」は、ある党派（Sekte）に属する自分が、別の陣営の者と対話するIJにはあり得ない。だが、IJの注の異様な書き振りからすれば、むしろ、実は、それらへの拒絶から生じる孤独[◎]や、ショーリングが「IJの「自由」と呼んでいるものの、自身が常にどこのまでもそこにあり続けると言われる、それ自体異様な「自由」に他ならない。ブッフハイムはIJの箇所への注において正当にも、自由に関する論究が、それ自身「自由な行為（freier Akt）」として行われなければならぬことを指摘し、しかしながら、だからとこつて『自由論』はレトコックに頼つた、十分に練られていない作品だと見るIJには出来なこと注意してこる。ただ、IJの「自由な形式は、ショーリング自身の初期の同一性体系の実在的部門における、幾何学的な、方法との明確な対比の上に立つ」とこつもともな指摘は、それだけでは單なる図式に留まらない。IJでは既に形式は問題ではない。『自由論』における「対話」は形式ではないからである。それでもかかわらず、「対話」が重要であり、「自由」が問題になるのは、峻厳な拒絶による孤独な自由におこつて、「対話」が成り立つ。言葉が沈黙において成り立つよ。

に^④ が故にである。

IJの「の」とから読み取れるのは、IJの「対話」が形式でないばかりではなく、渡辺がブッフハイムを批判しながら強調してくるように、単に外的な刺激とそれへの反応として理解されるようなものではない、ということがある。ショーリングの「対話」は、一面では『自由論』の成立した状況や環境を示しているとともに、ショーリングにとって内面化されたものなのであり、その意味で「対話」として『自由論』を読むのならば、『自由論』をその外部へと開くことと同時に、われによつて『自由論』そのものが開じてゐる新たな地平が明らかにならなければならぬ。

テキストに戻る。この箇所は、昭らかに、同じく厳しい拒絶の態度を見せてくる序言末尾の文言（VII, 335）と呼応してくる。ショーリングはそこで幾つかの希望を語つてくる。その一つは、「共同する努力の精神が更になお自由を強化し、あまつにやしづらさで一人を支配する党派精神（Sektgeist）が、認識と見解の獲得を邪魔しないよう」、とこつ希望である。IJでは「希望」である以上に皮肉でもあり、IJには党派性への明らかな嫌悪がある。これに先立つもう一つの希望は、ショーリングに向けた攻撃を行つて来た者達も、ショーリング自身がそつとこつて、意見を明確に表明して欲しこつことIJとある。IJには、論争を受けて立つとこつて宣言があるかに見える。しかし、その希望を語る中でショーリングは、「つかしながら、論争とこつて作為的な捻れた進み方（die künstlichen Schraubengänge der Polemik）は、哲學の形式に相応しいやのではあつ得ない」と述べるのである。敢えてパリフレーズするなら、ショーリングが本当に論争でこつねのま、陰で行われてゐる批判が止むIJと正過ぎな。

IJの筆を考えるまでは、『自由論』は論争のための書ではない。それは党派に属する類のものではない、党派的な他者を攻撃するための

ものではない。そこに攻撃的な言葉が見られるとしても、それは精々、党派的な者達を排除するためのものであらう。だとすればわれわれは『自由論』を、例えばヤコービやシュレーゲルとの論争においてだけ読むことはできない。少なくともシェリング自身の意図においては、である。むしろ『自由論』の孤独を認め、自由へと解放たなければならぬ。そして、しかし逆説的に言えば、それによってこそ、『自由論』は一つの対話篇となるだらうし、論争に解消されないような「対話」においてシェリング自身が希望していた精神の共同^⑯を見出すことが出来るのではないか。

結 び

思想は言葉とならなければならぬ。だが言葉は、それを定着する筆記具から始まり、執筆の時間、思索家の身体的・精神的状況、歴史的背景によつてこそ現実的なものとなる。そもそもわれわれの語る言葉そのものが、ここに初めて無から生まれるものではなく、われわれは常に他人者の言葉を語る。だとすればこれらの、いわば質料・物質的な、レアーリな条件は思想にとつて「外的」なものだろうか。しかし、一方において思想はその核において、それが「意味」を持つことにおいて、イデアーリなものでなければならない。その時、言葉は彼自身のものとなり、彼はそこにおいて自由であるだらう。

われわれは『自由論』を一つの「対話」として見よつとする。それは、歴史的な背景や、あるいは「論争」を、それらが「外的」なものである限り排除しようとするることである。だが、レアーリなものは、内面化されることによつて、むしろ必然的な条件となる。われわれが対話の観点に立つとするのは、レアーリなものを排除するためではなく、むしろ、

それらを「対話」において、しかも重層的な対話において見るためにある。その意味では、『自由論』はシェリングの諸著作の中でも際だつて豊かな、ふくよかさを持つように思われる。実際、『自由論』には、遠く、近くからの多数の声が響いている。われわれが先に「ヴェルトアルター」との関係やヤコービとの関係を強調する」とを問題としたのは、そうした文脈を取り戻すためである。^⑯ シュリング自身の過去の思想との対話（最初期思想、自然哲学、同一哲学、直近で主題において共通する「哲学と宗教」との関係）、同時代思潮とのあからさまな（シュレーゲルらとの）、あるいは沈黙における（ヘーゲル、エッティンガーラとの）対話、それらは「対話」の内実として、『自由論』、そして自由そのものを本質的・必然的に成り立せているものである。しかし、それだけであるなら、「論争」を「対話」と言い換えただけにすぎず、『自由論』を「対話」として読む意味は小さく。むしろ、『自由論』の「対話」にとつて重要なのは、哲学史との、顯示的な（プライン、アウグスティヌス、スピノザ、ライブニッツら）、また暗示的な（アリストテレス、ベーメルらとの）対話である。これによつてわれわれは、『自由論』を「ドイツ觀念論」という枠組みからかなり解放することができるのではないかと思つ。更には、『自由論』のシェリングが知らなかつた、むしろわれわれによつてこそ可能なる対話として、中・後期シェリングとの対話、ドイツ觀念論以降の哲学・思想との対話が考えられる。そして何より、そこにおいてわれわれ自身と『自由論』との対話が成立しなければならない。^⑰

ただし、その「対話」は、形式としての「論争」ではないとしても、それ故に微温的なものだと考へることはできない。その「対話」が上のような孤独において、拒否の姿勢において現れて来るととき、それはペー^⑱シの言つのとは些か趣は異なつても、確かに「一つの挑発」となつ。

- Hennigfeldの翻訳書が書かれていたことである。幅広や、『哲學の形而上學』か
ら「ハーフルト・カルト・私講義」執刀を以て視論にこだわったCHコングの
『畠田縦縦』上題の研究である。
- ⑪ 例えば Tilliette, S. 96 (邦訳 九・十頁), Buchheim, 1997, S. 168を参照。
- ⑫ 『畠田縦』からの注脚標示記述、如釋子本・縦縦の點如く如何にか
ねたる、改換翻訳を経た (§.ドルク)。
- ⑬ Fuhrmans, 1954.
- ⑭ 例えば 一回七回。
- ⑮ Heidegger, S. 4, 194 (邦訳 一七・三二〇 一回), Fuhrmans, 1964,
S. 33, Tilliette, S. 106-107. (邦訳 一〇八 一〇七回)
- ⑯ IJの帳せ一八〇九年の著作集序文題題に明かに表わせられてゐるが、以
降の刊本せの部分を削除してある。IJれを復活せたPh. B.塗の意義
は大き。
- ⑰ 例えば Buchheim, 1996を参照。
- ⑱ IJの帳、幅尾の塗、Brownがやや図式的だが明解。ただ、Brownが
『畠田縦』を成功した著作とは限つてゐない。
- ⑲ 『畠田縦』ヒルゼ以降のCHコングの思索との関係について、最近ではハーフルト・カントアントラーテーを「実在的部門」、「カントアントラーテー」を「觀念的部門」も認めた (一回七回)。両者を一つの組として捉える觀点を
提示してゐる。IJの図式の展開によりてハーフルト、以て後期哲學がどうを
視野に取め、積極・逆極哲學の成立をIJの觀点と認めてゐる (一回三
三回四)。興味深く捉え方であるが、われわれは幾つかの理由からIJ
IJでせじのした觀点は採らない。第一に、IJの觀点の追求では考察すべ
れトキストの範囲が大幅に拡がつてしまひかねぬのである。しかしJ
れは單なる技術的なレベルの問題に過ぎない。第一にせば、『畠田縦』をそれ
以降のシヨーリングの思索の一端として読むことは、『畠田縦』の独立性を
剥奪しかねない危険がある上に (これが本稿の基本的な論点の一つであ
つた)、「カントアントラーテー」だけのまでも、この見る積極哲學の時
期まで觀点を延長することは、時間的な距離が遠ざかるのである。そ
のため、実際IJの論文におけるハーフルト、当然のJヒンダルト、『畠田縦』
固有の課題 (例えば悪の問題) については考察を意図的に翻譯してゐる
- (一回七回参照)。第三にせば、なるほど『畠田縦』が哲學の觀念的範囲上題
かねば、Hヒンダルトの如きはCHコングの縦縦の點にかかれてゐるが (VII,
333-334)、しかし、CHコングの場合は、縦縦の點にかかれてゐるが (VII,
333-334)、しかし、CHコングの場合は、實在的なものを、實在的なものは觀念的なものを含んでおり、實
際『畠田縦』でも實在縦の要素ないし自然哲學が決定的な役割を果たし
てゐる。『畠田縦』に一つの特徴性を述べる)とは不自然
ではないからである。更に、Jれはハーフルトの問題ではないが、次の
ものは縱縦や横かかはりとは握りしておかなければならぬ。『畠田縦』未
尾 (§49) ドセ、一連の論文が手取れておつ、「ものなかで哲學の觀念
的な部門の全体が次第に叙述されるだつて」、と謂はれてゐる。他の論
者が認めてこぬものとして手取られてゐるのか「カントアントラーテー」
であるとやれば、「カントアントラーテー」が實在的な部門を成すところのハ
ノの基本的な懸念は如何せぬかといふことなるが、逆にハーフルトの想定が正し
てゐる。IJのドセは既に述べたが「カントアントラーテー」はせぬない
ところである。
- ⑳ Buchheim, 1997, XIII-XXV.
- ㉑ 実際ヤコーブの思想は、主としてカントやハイデル、クーゲルとの
関係において取り上げられてはきたものの、それが獨自の意義について
せまじ注意が払われて來なかつた。Bollnowの序位論文はやつては
に一石を投ずるものであつたが、BollnowはHammacherの論
論集においてや、Brüggenの論文 (後撰) を併め、その點を取つ上げた第
一部 (第一部は文部) でも、取つ上げられてゐるヤコーブの、か
らの影響關係である。日本でもヤコーブが取り上げられるのは、多くの
場合ヤーゲルとの関連においておるが、神子上、一九七〇年がヤコ
ーブの哲學それ自体を取り上げてゐる他、スピノザ研究者として知られる
上藤も、スピノザ主義との関連からヤコーブの研究を進め、ヤコーブの
思想を独自のものとして評価してゐる (文獻表に挙げたもの以外にも神
子上ヒト藤にせやヤコーブ関係の論文が多々)。
- ㉒ 例えば後撰ヤーゲル宛書簡。
- ㉓ 例えば Fischer, S. 153-160, 672-680.
- ㉔ 日本でも一九七〇数年、IJの復刊は日本で。後に触れる久保の他、上記の

論争をフオローした裏面、ヤーノルト・ホルト・ブリッゲンの「超自然的觀念論」と

この「物語」の相対化を語るヨロ誠の「如體文かある。

Brüggenはハリンクとヤーノルトとの関係の外面的歴史的経過、両者

の批判的な相違点について論じており、ノンバクトだが参考になる。ヤ

ーノルトは、自然と超自然的なものとの区別の強調、対するシーリン

グの「同一性概念」、前者による後者の批判が簡潔にまとめられ、シーリン

グの「同一性概念」が生成・発展の契機を導入するものにならぬのは、ヤーノ

ルトによるものだとある。この観点から、Fuhrmansは、シーリングの

批判せよやヤーノルトが決したものではないとする見解が批判される

(Fuhrmansは後注を参照)。久保もヤーノルトとシーリングとの

論争における「有限者と無限者の関係」について簡潔で要を得た整理を

行い、とりわけ『自由論』以降の変化をシーリングのヤーノルトへの接近

じつじ見えてくる。なお、神子上、一九八〇年もヤーノルトとシーリ

ングとの関係を取り上げてゐるが、一九八一年以降の両者が中心であつ、シーリ

ングとのことで「ヒューリッヒ講義」が取り上げられてゐる。

Peetz, S. 12-13.

26) やつとや、最近ヤーノルトと神論論争との関係でヤーノルトは触
れるにとどめ、高麗せやヤーノルトは全く觸及してこない。両都とヤーノルト
学史的な関連には懸念的である(後述)。

27) 例えはFuhrmansは『血田論』を本質的な意味で対ハリンクのや
のやるべりか。Fuhrmans, 1964, S. 139, 141, Fuhrmans, 1954, S. 166-
172, etc. 田本ドガット、田本がいの坂を強調してこ
(田丸一郎)。やれどは別に、田本やかの『血田論』に至るまでの
歴史にはさぬハリンクの関係を、特に両者のスピノザ
主義との関係から抽出した酒田、一九九九年は大変興味深い。同じく
酒田、一九〇〇年も参考になる。

28) ただしこれ及びカント論及びハリンク論及には違つてゐる。

前者は本文中でなわざるのに対し、後者は注にねじりである。ハリンク
がじつてハリンクせかへて其の既に過去に屬つてこたのやうなつか
るの、つまりこのことば Gulyga, S. 240. 酒田及びBuchheim, 2003を参照。

31) Plitt, I. S. 74, AA., Reihe III, Briefe 1, S. 17.

32) ただし、叙述の「失敗」の内容の「失敗」とはまた別であつ、「叙述」

せむつやハリンクの血田のやのじつて評價すべきである。なお、
『叙述』の形式については平尾、四一、四四、五八、五九頁参照。

33) いわゆる初期著作の歴史的な「ホトキストを論じた松山、一九九六年が
参考になら。

34) Oesterreich, 1996を参照。なお、神論論の觀点から『血田論』を據ね
ヨロ成り、一九九六年は『血田論』の藝術的な表現を指摘し、Oesterreich,
1985' Jantzenも参照提示してゐる(一九九頁)。しかしもだ、ヨロ成
り、一九〇〇年はOesterreich, 2001にこゝでせぬが、Oesterreich

は思想内面よりも表現形式によつて注目してゐる(一九一頁)
表現形式と思想内容との連関はそれ自体難しこ問題であるが、われ
われがいじりて取つ上げる「対話」は、表現形式(文体、レトリック)と
言つておのづか。シーリングの文体やレトリックを論じる資格は私には
ないが、詩的な表現、神話的な表現と、「対話」形式とは矛盾するもので
はない。

35) 渡邊、凡例五。

36) Oesterreich, 2004は「の箇所を示す。ヤーノルト「ヤーノルト・アルター」の
叙事詩的語の先駆けを見、また、アウグスティヌスの語り口と重ね合
わせていふ(S. 486)が、いはば一部を譲る。

37) Buchheim, 1997, XXVI-XXVII.
38) ただしこれは『血田論』ばかりではなく、シーリングの著作
の序文、緒論は多く取られた。

39) Buchheim, 1997, S. 164.

40) いの坂、森は示唆的である(特に一〇七頁参照)。

41) 渡辺、一九九九年は、ブッハイムの注釈の有無を語るながらも、や
れが結局はシーリングの独自性の「撲殺」じつじを危惧して
いる(一三三七-一三三八頁)。そのため渡辺は『自由論』を「対話」として読む
じつに批判的であるが、われわれが『自由論』を「対話」として読もう
じつじは、既に述べたように、実は渡辺と同じ危惧から出発するが故
にである。しかし、そのためには「対話」的読解が『自由論』の内面を
明かにすべきだなればならない。

『血田縕』を脱稿したのが四月一一田やもづ、エトランの暦文は「の
田かの畠一一田にかけて書かれてる (Jahreskalender, S. 16)。現行テ
キストでは序文の田付けせ四月一一田やもづてこねだ、飛ひく最初一一⁽⁴²⁾
田に書いたものを書き直したものである(「の」の坂 Buchheim, 1997
の注を参照)。だとかれば、本文、特にわれわれの取り上げた辺を領む部
分を書き上げた後、その延長で序文を書き直したのではなかとの推測
は可能であり、われわれの読解に適応する。
『血田縕』脱稿後の四月一一田やもづ、ベルト宛書簡で、われと世
は同じ「彼の作為的で螺旋状の縕縕 (seiner künstlichen und auf

この（S. 35）「ホーフ、Hennigfeld」が「キリスト内在的な解釈を志向するの」である。しかし、シロコハの汎神論概念の玲味の箇所への注釈としては、ヨーロッパ以来の汎神論論争についての歴史的な説明を援用しており（S. 37-46）、「貫性を欠く。われわれは、『自由論』の体系的解釈への志向そのものは何よりも重要だと期す」が、同時に、われわれ自身は単純にテキスト内在主義を探らぬ。Hennigfeldが「異種混合的な叙述方法」と考へて居るものは、シロリングの対話の相手が多種多様であつたといひことを意味するのであつて、それらの一見すると外的に見える要素が「自由論」における「対話」においてもはや内的な要素となつて居るのである。

Schrauben gesetzten Polemik」(BuD, III, 597) にて「表現を公刊」
一ヶ所上記して置こうるが、『皿田體』は文の「箇監せし」と一ヶ
ルを念頭におこたるの上記べしもの。

本文 (§. 46, VII, 410) でも、ハトニー＝ゲルの「論難の虚しさ (die Eitelkeit einer Polemik)」が指摘され、実じいの極葉は「虚縁つ返されにこゑ。それが、結果的に相争の論争となつてしまつてこぬ感は拭えなこじりとも。實際、ハトニー＝ゲルの口調も、おぬこはハトニー＝ゲルの辛辣なが乗り移つたかのものと見える場面がある。

いわつた共同せ、初期ロマン派の求めたものではあつた。フコ＝ユリ＝ハトニー＝ゲルの「共同哲學」、「共同文學」の理念 しがやれなれなれぬこや共感ではなく、お立、葛藤を知むやの心のせんの詛である。IJの批判のこゝは大津を参照 (特にハ 一一回)。

46 Hennigfeld博士、『皿田譜』が概念論理的な議論、聖書や神学の参照、神秘学・神智学的な語り方、詩的なメタファーの使用といふもので、異

種混合的な叙述方法をひつてゐるがゆゑに、読解が困難になつてゐるところ (S. 15)。われわれはこの點にては賛成である。しかし同時に、Hennigfeldはこの論解せりに亘つた点に抗つて、『血田鑑』を何なつても批判的な体統企図として讀むべしであるとする (ebd.)。更にまたHennigfeldは、血田の体統は固执しならざり、「古事記」決して廻る去りてこない言ふ方 (§1) がこののセヤマーの主張を擱すのだによくFuhrmannの見解に触れつて、よつと重要なことは、シヨコソクの問題提起の体統的な解説であつて、この問題は特定の人間に限らぬものではない、として

〔48〕 松山、一九九四年はシェリング自然哲学を当時の自然科学、自然哲学からシェリングがいかに多くを吸収しているかを具体的に実証し、テキストのポリフォニー的性格を詳細に示しているが、それは『自由論』にも言えるばかりか、『自由論』ではその多声性が内的対話にまで昇華されているように思われる。

〔49〕 これら先行思想について、『自由論』の研究者たちの言及は極めて貧し

い。特にアウグスティヌス及びハイエニシに關しては、彼の「悪=欠如理論」がシェリングによつて乗つて越えられたとする單純な議論が繼承され続けているのみであるが、思われる（例へばFuhrmans, Einleitung, 1964）。詳論は他口を期するが、それだけではシロコング血統の悪概念の明確化にとつても不十分ではないかとの疑問を呼つておく。

49 山口誠一の表現に従つて書けば、ドイツ觀念論といつ「物語」からの解放であると言つてよ。」

50 例えは菅原（第二章）がHogrefeを援用しながら、「ヤハルトアルター」から『自由譜』の難解箇所を説んでくる（後者を前者に還元するのではなく）のは参考になる。

(51) 無論、これらの歴史的文脈を持つ複合的な「対話」を、全て一律に論じるにはできない。まして、『自由論』とわれわれとの「対話」には全

〔52〕 Gulygaの誤解では、シェリングのおシヨーレーゲル論難は「友好的なトーハ」で行われてゐる（S, 237）。実際シェリングは『自由論』を

領む著作集が出版された後、¹⁵³ いざやハムーネルやアーレルが送り
てこ。¹⁵⁴ (Jahreskalender, S. 24-25) しかし、いざやはKratz¹⁵⁵ が、
ぬせシハムーネルの人格に付いては友好的であつても、事柄上¹⁵⁶ おこ
て辛辣であつて宥和的でないといつてこ¹⁵⁷ の世論がでた。 (S. 477)
ただ、われわれはもつた辛辣をやめめに「お詫」¹⁵⁸ と観る。

¹⁵³
Peetz, S. 83.

(本学文部省非常勤講師)

也記：いざやは院生、大阪学院大学の研究助成（平成十七年度）による成
果の一部である。記して感謝申します。